

焦点

「原子力関係者は、ロマンチックであり、夢見る人である」とが、一方で求められる▼「原子力の日」(二〇月二六日)を以て、富士山麓、裾野市の日本電気協会研修センターで四日間開催された、国際シンポジウム「地球環境と原子力システム」の主催者、東京工業大学・原子炉工学研究所の藤家洋一・所長が冒頭論述で、述べた言葉である。通訳なし全て英語のこの会議は、ある意味では極端に象牙の塔よりの、学者、研究者の研究会か、と思えた▼ところがどうして

米英、独はじめ、ロシア、カザフ、ハンガリー、韓国、中国、台湾、インドネシア、インドから、第一線の研究者、専門家が集まり、我が国の学者、電力会社の専門家、メーカーの権威ら、約一五〇人を集める結果となり、討論は白熱し、提言も示唆に富むスケールの大きな、国際シンポとなった。大成功である▼クルチャトフ研のガガリンスキー副所長、カールスルーエ研のケスラー博士(独・安全委員)、原子力と地球温暖化の両面を追究している米國パデュー大のオット教授、オゾンの研究で有名なマイアミ大のゴードン教授らが真剣に議論した▼原子力はいま、ほんの一部、つまり電力エネルギー源として、生産に利用されている他は、医療、核医学研究、放射線応用、バイオ領域などまだ開発途上にある。原子力を総合科学として他の科

学技術領域へ展開する事も重要だし、さらにアルトニウム利用技術を通じて、超ウラン元素の「非放射化」「消滅」も可能である、としている▼藤家教授の所論は、いま「原子力の必要性・安全性をPRする時代ではなく」地域社会が自ら共生を求めて「原子力を総合的に未来への夢として見る時代」へ変化した。原子力には地球を救う能力がある。と不動の原子力哲学だった。

学技術領域へ展開する事も重要だし、さらにアルトニウム利用技術を通じて、超ウラン元素の「非放射化」「消滅」も可能である、としている▼藤家教授の所論は、いま「原子力の必要性・安全性をPRする時代ではなく」地域社会が自ら共生を求めて「原子力を総合的に未来への夢として見る時代」へ変化した。原子力には地球を救う能力がある。と不動の原子力哲学だった。